句經題

全

中村俊定文庫
文庫 18
383

中村俊定

京都帝國大學圖書

非売

平家入道浅黄裏の事

もゝ人おのゝ好き変よ奢るゝ
皆仙洞殿や雲客殿
下のゝ殿ゝ迄中乃
仙洞殿を吾身生花も又
仏殿ゝ極楽世の花を
奢る仏中の心なるべし

中村定文庫

鹿苑の御四方を初白雪
の門より入のち御寺法七日
つゝ又蓮池より御門迄
指立の万句を無尽一編を
ふりいくとも数一統のお有
様無尽元文五のまま
乃秋芭蕉翁ひ再二万

句数を生数を
いまを始まる示之最の直
雪の中庵四方より修訂を
求る滑稽の書籍る売り車
を始まるいとむ元さ稽を
清制の学い青をもて異を
つゝなる様世に伝して

偏奈を新出親子の墓撰定
ありまして形容嗟嘆の
至とされる所以多く
めぐる所の者共和尚
ご自分ご原稿今ハこの
業撰まるとて此墓に
あらしてお墓を造立し

碑面すり寄世の紅影後
忘梨生涯の孫子孫る
事形く志を安堂
了却むへ一回一月
廿七日寄寄の師
命再忌して湯利利
法おこてあまれを

くすのもとをすこしはな
れ松ノ下せきの日ゝ
高ゝ志ゝ宗祇ゝ
泉ノ月八ノ乃ノ下ノ頭
ゆゝとして仙化しぬ歌笛
の無常壇の浦の海乃
面ゝ白く時ゝ水中ゝ

ふゝ
墓哀や寂時ゝ
日ゝしの里ゝ
ゝゝ玉祇堂ノ後社
中おゝ
時を向伏して遠ゝの
ゝ

華表より へまゐ来ふ又
影ば碧さ原乃思ひ出
カ しかのこ

米寿祝
四社

自生葬紀逸像

辞世

此と言ふ
とめ言ふ
お目ふ
この家と言ふ
所建て向て
中ふ言ふ

六十八翁紀逸

追善

自生菴好主人八亭の年月友と栄る
文保うし毛巳ほる皐月の比此世界
去侍ると少伊共江行夜泊出
船中一睡好夏と彼宇遠と會て芝て
共人伝慕屋と毛唯名ゆ今る西の音
はとと事伝男出ぶ〜い庵
ゆ侍ると今
ことの大毛雨と降る皐月夏 無二亭 繁水子

年月の流自生菴不幸の中毛海
山陽ぬまい萩乃葉志音信と毛
耳を濡しぬ
立ゆ毛野し者も赤し嵐の笹笠 仝
仝
神狭仮名ふりむ中年月乃 短長庵 國字子
仝
年一方中生不ゆ毛足ゆ夏 倚絃子 衣 碓明子
仝

夕明庵ニ云ヒ合て門ニ入て俳諧乃
道ハ墓ハ人ニ矣面の折ニ心安
ニを等て手繰をゆるまぬ其中ニ
十明庵と別号成得て窓ニ飲て
かきをなのニ言ハ年月の初川
ニ黄泉乃ゑ面を侍ニ今さ
すれ一て古里出一て
さみ乃ハ出ハ言ニ庵ハ初ぬ事ニ宝巷子

十明菴

仝

保ゑニ年ハ年月の内ハ郷書子

仝

年月八日生ニ庵の所ニ侍ニ

ハ武訪婦

昌ニい佛乃門や軒の内ハ梅薫子

鳥明菴

仝

住みなれ志ニ村一武玉川　松峰舎

さニ乃ハ年ニ春ニ油の香　蛍社庵　来義子

梅樫乃ゑニ除安一　西岩窓　朱絃子

仝

郭公鳴くなのりの川や油の瀬　渡舟子

なりかわりとなのの世世の人や栗太郡梅社子

蓮や共玉川なるなの川　蘭社子

さみだれの燈籠きりき河の角　龜丈子

まき新平云出し草や菖蒲葉　九社子

蓮や涼しき蓮の わまろ川　堇社子

さすらえし　柏を葉ぬさつきの宮　宇兮子

神しわまき所の深の井の水　湖中子

先師乃角伝の流水を　硯田舎

しらくさ八口那し　丈を手向の角　臺簫子

初七日

鄙里子恩を筆に花のかを　仝

二七日　谷中弦泉寺一清子

去るすゝ去を去をて血し　良を那　仝

三七日　五月廿八日

阿乃弥を斯てとまへ所の面 仝

四七日

涼しさや儒乃好きやすの汁 仝

初月忌

弥月の乃ゆ我思ふ尾ハ暑 この角 仝

五七日

極楽乃狂奇多し蓮乃宮 仝

六七日

手布しも手むすび心や武 玉川 仝

仝

惟子を四日ゆ多ぬく佛 ホ那 十全庵 紀亮子

初七日

ふさ乃手向や百合乃図両 仝

二七日

杜若入梅の晴ア乃紫雲ホ 仝

三七日

心のゝ曇る憂きゆ 庵の雨 仝

卯七日

在次郎〻土用尺色々さい柔瓜　仝

五七日

一柄杓　俚乃ゑみゑ也音需義　仝

六七日

あの屋〻尺てを　椿乃つゑの角　仝

七〻日

やの〻耳〻秋也多貴へさつ〻ゑ　仝

百ヶ日

先師編ゝ黄昏日記ゑ冬瓜乃説

石の屋昼ゑ立て朝夕ゑ特多のみを
きしも今ハさやかゑ〻耳り勢
多瓜さへ百姿ゑ　手向の角　仝

追善

吹文月魂祭ゑ向ハ先生乃記事ゑ
予度〻さの句〻高点ゑ得し
事ゑ思ひ出し〻ゑ

涼の角手向ゑ　瓜の馬いなかゝ　十向菴　安彦子

仝

我の窓乃蛍い消し心地の角　知明菴 紀穂子

七こゝ

彼岸ゝ秋まち点の日数か　仝

追悼

短夜ゝもちき別まぢかゝ　路長子

良医ヒ我捨ゝれい

菜摘ゝ月ゝ毎ゝ以ゝ　佳乃旅　仝

仝

梅の乃点我聾めぬ人も形し　万稿子

此夜ゝ空ゝ毛き以ゝ川ゝ　ゝき乃　逸府子

かゝゝ世ゝ今年い新毛五月乃　槌夕子

仝

いゝ毛ゝ以ゝ　ゝ新毛ゝ年月乃　紀仙子

仝

短夜ゝ　ゝき夏乃夜　ゝ　紀方子 女

係終乃朔寒ゝ　ゝいき

阿い西へ別まぢ　ゝ　紀柏子

夏ゝ日毎ゝ夏以　ゝ合ぬ形

伊予日新平うつる　夏本立　仝

その解き光信七うり新正ぬつ解〳〵

なせのつゝえと為うあねハ家光左

都〳〵とうゑ南し

蓮臺形風蓮乃　終乃日　仝

仝

扨ともる物ゝ哥ゝ中皐月百　狼牛子

海乃多ゆうし時角乃おいされハ

ゝ沢もふき世乃　弥平五月雨　眠皐子

いろ〳〵ゝ哥ゝ　廻向院

歯吹如来　井廉ゝ　ゝ行ゝ

夏草ゝ　井も　ゝき　掘ゝ　誓ゝ　那　紀逸

ゝき〳〵　遥平　雲乃　乃ゝ　ゝさき　臺簫

高坏乃　蓍　煎餅ゝ　風ゝき　田社

ゝ行ゝ　友乃　ゝ　ゝハ夕ゝ　杜谷

毛氈ゝ　碁　盤　白ゝ　月ゝ　舟　紀宴

扨ゝ　蓍ゝ　雨ゝ　ゝ　路長

風吹いそぐ中の毛　秋乃春　紀穂
手拭き　初戎　僧のかち　紀明
面白さうなる　扶む　産湯　豆　紀袁
うこの人と　恋平　うなぎ　行燈　紀見
叶ふ客人の口の　名を　眠皐
すゝ　芳野　金　世の中　安彦
一村乃　るまき　ふ　旅芝居　紀影
月夜　うゝ　竿　夜　書　紀亮
新涼の　暁の　夜　紀栢

火宅　門　涼　紀彦
恍橘乃　門　毒　乃　紀袁
干　うゝ　文　紀袁
法華酒の上　酒　眠峯
俳数乃　欲　紀穂
正雪　敷　居　行　紀亮
移　う　人の　影　安彦
玉髪の　妻　紀長
岩下　揺　大　箸　四社

海中に打ぬ[illegible]一百[illegible]ふ旅　杜若
児一人ゆくの乃なのはな本に　挽　[illegible]
野菜よむさゝ蕊　雨をきゝながら　[illegible]
ゝも居ゝぬ　次の花　石　[illegible]
接ぎ　月の内　今年　[illegible]
ゝ　稲　妻　[illegible]
待宵　句の数　入間川　[illegible]
出し　中一傘　嶺　[illegible]
打ぬ　葉乃　て　指の先　壺菫

かゝぬ初の　を　さん　[illegible]
南より咲出ゝ花　西乃空　[illegible]
春日　静　聖衆来迎　[illegible]

追善

廿先日生庵のきりゝす　句今
さゝの様に男ゝ出ぬ

二夜降ゝ一夜ハ悲し　五月雨　岸社子
さゝ[illegible]を　他人ゝふ[illegible]　手向　田光子

仝

自生菴宗匠とうくすもゝと　五月

のゝしめ西方浄土へ庵、なむすひの色て

俳諧も常住仏の吟声の所

なるとかゝすゝ

文臺も　机も　はなしの乃　一簀菴

惜しみ紀逸去て物の色ふし方オの姿

き間余ゝすゝ百の南の子井保宏手毛

只徒乃かゝゝなるもゝゝ

神ゝとゝ入梅さゝ降ゝ如　暑の角　冬嶺子　歯朴林

紫陽花や淋しも時の手向草　二町子

我玉川の流楚さ入ゝ大川と赤ら

毛ゝ花咲る泉とかゝて行ゝゝ暮ゝ成

疑ゝゝ我惜ゝす　学布　三湖川　田幣子

うゝゝの乃四菴の春ゝ梅の香ゝ

茶と恨ゝゝの古事も此時ゝ思ひ出ゝて

俳諧我ゝ乃ゝ　林一　故性　学　田臺子

此佛何ゝ事　免布ゝ　ゝゝれゝ　社静子

早蕨や煙をつゝむ百姓中　紀逸

妻子ども家ちのき雉子　田社

菅笠に稀る波しの舟呼ぶ　田旦

月のかゝぬ二日さゝぎき　覓社

月の緑すゝとゝ鍋揚げ岩角　市町

菅人こゝろ玉留乃嶽　田城

仮初に旅衣ゝ妹背ゝ　吉門

神に流まる麦　炊くゝ　執筆

紙ゝの形巾て用ゝ佛具廊　免社

性を思ひ〳〵ゝ加紙ふの舞　市男

玉むしの沸て百〳〵舟に更　田社

ゝ我乃刀やゝきゝとゝ　田旦

梅雨時ゝ栗の葉陰る角ゝ　田体

舟を上ゝと狩ゝ寄生ゝ　吉門

菅人と知ゝ河原に蓑ゝ神　田旦

ゝゝ〳〵〳〵と待む市　免社

ゝゝ〳〵ゝ蕨の茶　吉門

[illegible]の海五六町　四辻
[illegible]二人埴島[illegible]　市町
出葉[illegible]の[illegible]定める　四堵
京物へ悼なる　和中義　兒社
[illegible]を[illegible]興[illegible]剛[illegible]の邦　四巳
[illegible]を[illegible]静ふ筋柏子　四社
露[illegible]　淤路島山　吉門
[illegible]の[illegible]一[illegible]市[illegible]る　四堵
人[illegible]菓子[illegible]思乃字　市甲

[illegible]の使[illegible]　四巳
[illegible]入[illegible]奥の瓜音　四社
[illegible]も[illegible]月　兒社
扇へ[illegible]　菊吉詩　市甲
行く秋の葉一[illegible]絲幅　四堵
[illegible]乃[illegible]葉[illegible]　四巳
[illegible]　市甲
[illegible]を　兒社
[illegible]　湖十
三石乃[illegible]葉[illegible]香

初稲を皆春乃諸菩薩　米富

追善

茶毘茶陀の甲斐も形ばかり　玉水子

自然庵の日比坊ものぶハ一入乃

ふむ手形ばかりと

流乃ぬきゝ心を尋ねや西の空　木髪子

慈鎮和尚乃歌を詠めて月を詠ーとよゝ

ー八岩本の神垣世乎谷中法泉寺紀逸

の尊碑ハ尋て柏山四鳥の雨をそゝく

音を今絶かゝるやなひ多　杉雨子

仝

萩さかぬ五月雨の長ふる　樗南子

ふるもやふハ音と仝月と眠る　卯雲子

表合

月は白き物乃某や山さゝ　紀逸

清を玉あらんと思ふを撞く　杜谷

さゝ風納屋の数〳〵吹ぬきて　仝

拵のうきくゝ立侍　仝

鋪別は丈繩　綜ふ湘の月　樓川

慌米俵　和工ゝゝゝと　連尺

仝

降て時雨井海を隔て時雨井　紀逸

降しも秋を惜まてすり江　茶外

松人の猶りる沈を研〳〵を　仝

ゝゝゝゝゝゝ吹売　仝

立縁るふい輪とふい月を澄　栖雀

葉芳〳〵き其時津風　来久

仝

白鷺宮日はい行為ふ郭公　紀逸

春ハ明安く船おろす春　連尺
ゆるもさぶ旅ハ羽織を形ナすす　仝
矢竹ゆ〳〵敷く小向乃宮　仝
立寄す助言も自の隈まらむ　平砂
拾ふ人ハ迷ふ色　初紅　杜谷

仝

舘月星乃西ふ[illegible]明　紀逸
牛乗拾ふ蕨花戸の[illegible]　来久

林〳〵さ秋後ロよ移の市多ふて　仝
新酒乃白ゆ[illegible]　仝
令日農月亭主乃膝の[illegible]　湖十
[illegible]多き[illegible]　松乃枝振　茶外

追悼　句ニ到来順

故の和月不佞愛足のいとゆ[illegible]
年迫ゆ去年ハ[illegible]
[illegible]と物さ次の月[illegible]

亡人の畫翰ふりさく田斐乃ものとゝ
なへ〳〵ゝ心おぼゆるなとのゝふみ
物事ゝ逆ゝ位や年月百 丹志
追善
待ゝ佛法の母や年月川 田且
為ゝ殊ゝ為ゝ為めゝるし 新の面 素立
道徳乃皐月四ゝ き夕の面 覓社
爰の宮や淀柴〳〵 ゝ星乃弦 田城
薄乃流れも亦〳〵 ゝ 雲甲

一郭拳ゝ惜ゝ乃ゝ ゝもの玖河也
夏の宮や乃ゝ ゝ数乃疎ゝ ゝ 来久
世ゝ信〳〵き ゝ言ゝを入ゝ 計事 遊之
曼陀羅も亦〳〵き 國や依の 田東
ゝき ゝ ゝ ゝもかゝ ゝ良ゝ ゝ 紀斐
ゝ角ゝ 波乃淀ゝ 五月か 逆宇
ゝゝ 仲人の猫も ゝ合き 屋馬
皐月百 ゝ ゝ ゝ 別ゝ ゝ 相重

追善

[illegible]　宗固

[illegible]

[illegible]

[illegible]　景保

[illegible]

[illegible]

[illegible]　まち女

追善

涼しさや紫雲のふたゝび　不言

雲と生まれ仏のうへの　碑簾

そのあとは　硯も閑し　夏の雲　連天

箱ヤ杖　ものこす　国土　逸文

俳諧乃至山格と　布屋

茶まで　此人　こゝ　米夏　正桂

此八日発

彼岡の仏生まるる皐月哉　東社
七詩も又よ紫の雲又孚　沾社
知菓やなき跡とも芳しき　芹社
碎角しき影さへあの世の卵　綺筵
袖ゑ餘ゑ猿ゑ侍ふやきつき　紀桑
夏菓や一字の恩も芳しき　紀求
菩提子乃美架吸るし此仏半人
学ん音式入る方を西乃宮田虹

朝菊乃日新たるき別まし弁竹雫
侍の眠るの如し合歓の茶米冨
自生庵ゑ共宗ゑて芭蕉よおく蕉庭
式伝しらまこるよの厨侍ゑ
艾中ゑ星もるる花蝉時雨越峨
沢左乃果式んて乙去未知ゑや
此叟俳ゑ吸るる俳極宗往生の相ゑ
涼しさや髪剃日ゑそのあ式後呼焉

仝

夏のうちに　文臺跋より徑　机　寫洲

さゝ波や志賀の都の近きゝ向ふ　巴江

名所や古寺ちかき墓苔　圖南

あはれしふき玉川出苔乃底　芝立

陸乃奥雪をもとめん音と入　冬司

梅の時雨古き枕を知るかな　寛子

玉川の記念灯すや夏の面　皐社

さゝ波や昔のこゝろ伊の蓮　不並

茶の湯の世遠を恨やゆ樽つゝ　文尺

いのるさむ山人ふんこゝろ　紀荻

高ゆゑを志ほふ祝や五月雨　水巴

記念のふし歌詠れりまゝ

詠月の間を今や七月十　仝

さゝ波や恩の端　田泉

人性乗乃陸を間五月雨　逸季

七夕の帆帳を めい清ゝ　北恋阿

ゝ夏姿涼ふつき迄ゝ面　可貞

武玉川　五月の宵乃　閣ふ　黛社

清き灯を学の徒らや清の庭　蚕社
五月雨を純人ふつゝを向ふ　紀鳴
蓮の葉は雨も玉の露　手むけ草　紀水
ちるを清る徒や　きつゝ　百　桂社
七一日さを　紫陽花の彩り　尚魚
音信ふき　松　敲ふ　溪蘆
菜葉をつむ甲斐ふ　悔き人　尾谷
学を似る形き　音入きふ　孤山
經ちる　文壺　淋し　梅の百　大路
音出すや風雅　江戸の糸　柘榴　冠社
江戸風流生　後しい　合歓の糸　帯路
桂淋し　掃き　庭の梅百　紀明
月夜の　ふき　戸　雞　武鳥
凝ふ涼　き　芝　光垢世　男　紀見
学　て　悔　小　南圭
紫　旧夜　いゝ　の泡　紀男
虜き世　ふ　燈　童　尺素
もの　心　手向　学　旦眺

常住不滅の心を重ひ奉り

仏と懈怠なるべく仕ひ奉り　茶外

宮のまへ苔むしぬれぬ清しき沢　錢社

経夜を ちき別まや神の面　紀井

ご埴の民や苔を生ぶと猿田の住まるもの

常住不滅の手向ぐ民や玉川　菅子

五月雨や六字七字の名の名　綉蔦

五月雨や西一行ヵ社子乃御　帝下

さくれや 乾くなふき神徒　魚藻

五月雨も手向の民と寄りし　鹽車

苔みぬるの家も古りる徒の邦　壺和

左京雨や天もよる仏 我心　逸雅

日くまるのくもくく人や合　歡の花　官路

きみ多や苔も神のあちふ　露秀

きみ多や名代の桜　枯るより　章雨

白雨やくれても白き白牡丹　舍効

次月末の六日生菴に入て六日決定

南不再発して修行医療の事

約束して帰りしは里人の涼をもとめ別山と
朱雲の其姿しばらくとどまる
遠くい別き杖とふくせし　五月雨　紀山

其江は相州の地もさみだれの晴るる時きる
休浴乃浦の菖蒲の香と咲ぬ　歩蓮

紫陽花や志わまぶ〻の俳風
と子の句を画賛とせられし
今は花を一ぱいはるばる出す
紫陽花や秋もいのちけふき　神の宮　倚墨

遠国を備て西京の伝聞のうるふ年
入梅の長雨ふる物ゝ月　生　菴　逸十
むらさきや西のそらん草　麥雨
なるさ訪ふ扇をとゝ言ひ因も多　桃主
惜めども降る時ゆく　蛍の那　紀皐

廟前一面の柴垣
注ぐ水佛乃前や　初ゝ宜　仝
牧柱いすかる所の　泥金　竹瓦
高ゝ和ゝ蓮好ま一点よる　秀國

本日旅宿カふき所ニて　郭公　紀貞

うつ蝉乃経帷子ハ　忘納ニて　徑祥

こしの国成姫のうきまくら五月雨　文社

新らつま雲も白ふやかきつゝ　田牛

玉川のあハ白のうるゝ五月雨　田黛

涼しいな清の巻モ白い玉川　社鼠

短夜ニ思ひ立てゝ多ひ市ル　浙江

時雨降る毛白ハ月の見れる面　雞社

浪多ぬ池ニ白ハ影や蓮乃上　千谷

淋しさの雨乃庭や百合の花　里雅

橋ヤ人ふ川ふ　庵乃うち　知十

罪咎ハ人皆ふ白ハ　紀暁

入れ乃ニ白ハ吸ふ蓮の葉　紀帆

宮殿ふ白ハ雨乃手向ふ　紀雲

火祭ハ白ハ雨乃五月雨　紀十

こゝ白ハふ初つる紀逸の庭へ

自来り伝りて花ふ白ハ　こゝ

恵ハ白ハふ幻の花ハ　繰り花ふ

伊勢ふき別所とゝ称しされい
宮井の清くも深きつゝ一車の業
くなき玉川乃名を聞るゝ者ゝ
故折乃姿とゝ思ふ〳〵ぬ

姫路合の、歳の頃や廿五歳　女こゝ

自生養ゝ人八三十年来乃病あり
ふゝ寒ゝき行ゝと朝夕と形く
老とゝこゝ悩さるゝ加ゝ免ふゝ
病ゝ者のさ小医術とゝ尽ゝ絶あり

折ゝ〳〵苦痛ゝ表ゝ形く注
この世の才ゝも米以花尾をゝ
をゝふゝ悲歎乃ゝ〳〵限を
ふ〳〵嗚呼惜ゝむ尾きい行年
六十八歳乃長ゝ夢ゝ見果て藤
終稱念ゝ動ゝ明寺行者乃
ゝ者もかふ〳〵

手の仔を握ゝ中免てゝ嘆ゝ　杜谷

仝

[illegible]る一年月百　相州　物外
木の陰も洗ふ波の五月雨　同　健志
明るとは八雲まで原の初音　同　川石
住なれし伏見も荒て塚ばかり　同　旦釣
夏草の弱き形をとゞめの面　同　狐笠
西行風和歌の一羽扇　同　蚊子
二日酒白雲の中に面の面　同　一滴
月乃あるもつむ花時　同　松朝
茶をもうむきゝ高合　同　杉調

四時庵の庭八暫和尚時庵珪琳の名おのゝ
蓮と号せし変もこのゝしの夫れ思へば
伺き三十年来の列席なる人々
名和尚四時と恐る後のゝ
楽しのゝの思ひのけすも此年月
八日遊無造作よ伺ゝの中まれ
名風流人の那
南元自生院紀逸居士と成とも
耳白きゝのゝ　あと此三句を手向ける

郭公ときの冥途牡丹すなり　何仏房　古路

野を行ふ茂るとは迷ふ死手の心　仝

五月雨乃　蓮華のまゝ三途川　仝

紀逸ハ黨乃大きうて笑ひを

投る勢ひ　ひのうちをこゝ

皐乃闇をこゝ形旅人影

ぬ夏満ち業足ぬ只厩雑

乃一句を五七音ふて屋て共焙

下る仕ふ闇をよ餘まるを以

夏きをとゝ和

死ぬもすゝさみのしの死乃蛍き而　信鳥爺　馬肝

紀逸を文きを芳名をこゝ

五月の浄土の茂ふ泉旅のは

年月乃睦ふ俳ふぬを行ひ出て

こゝ夜をこゝ筆を噛ふ狗裏

きぬ

洛加黒菴七十余叟

訪先る旅乃　作りやさつき川　宋屋

追善

紀の玉川とうちすんをも
よしつゝみなくてそんをも五月雨　存義

病中より五岳園を訪ひまして嗚呼
五岳を幼相を訪ひて一礼終る空
詩を吟ずる色

二十四ヶ年とすれば沙彼の昂るさう川　平砂
ぬし乃年皐月の雨を仕ふ時　米仲
五月雨を問ふ　武玉川　祇丞

こゝ長い きしきりに彼を紀逸世乃
耳を訪されしヒ今又此句を重ねて
いさむるよりは

問ふらく蓬きこ庵や　買明

竹をなぶ林をもるる秋の月

音たのもし　男女共に　西上人乃

ものをもとめ　いつるまつ　きてもはきし

象戯まるとて　物をのいま　安をたの

ものす　紀逸と我が　臭味を　知りなのめ

るる　元六十年来乃旧知なり　来

さるとこそ　此月　此日　此友と　会ふ言

葉乃　魂を　鎖しまふこ　ぬるさうて

唯ふひ　ぬを　吾れ

蔡　扶乃友　樓川

谷中　龍泉寺　墅　送して

むめ　実の　土を　踏るや　ひふ　高水　仝

初秋　をしめ　八日　墓　蔡の　吟

日こそ　涼　うぬも　休し　苔と　窟　仝

紀逸　死て　紀逸　有りを　玉川乃

あふ　反ねも　おの乃　業を　薄

ふ　や人　知て　我　又　志

猶行くゆくの夜 折ふすまくら草 湖十

雨時四衆見大宝塔住在空中又聞

塔中所出音聲皆得法喜 見宝塔品

法華や今日を盛りと咲く塔乃塔 吉原

菁おろる石やめのとつけくめしや 珠来

五月雨古兵どもの色 弥る 行く 萬立

門人乃 滴さぬ 袂や五月雨 超雪

併の 西つさくら 花乃花 秀億

世遠つき日や紫雲見や 吉門

極楽の世のうち色や白ゆふ 栖雁

弥陀寺参詣

夏草や あの女もと 夜乃 墓乃 雞口

二千仏乃 色も 世を去る 影ひかる 柳尾

白蓮の 文 つきの 半夏生 庭臺

法を乃 ふ 見てしや 西の 雨乃 由林

梅雨 三のく 火を 灯す 清泉

心の手 ゆりつ 乃 ぬき次 圖大

悟 一 消て行 の ほ ま 道院

いつまの年よりのあり乃ひ予ま白居易の
長慶集をとりてゝ見れば今ゝの
余波なりすゝろに思ひ出るまゝ
書ゝ松為ゝ凶ゝて自卑自而 匂狗
殺ひゝ中多を以ゝ乃ゝ乃の空 春堂
ゝも実をきゝ乃ゝ乃ゝ知ぬ梅乃而 溫克
ゝゝ時のゝゝ中風ゝ性乃乃 為樗 在轉
玉川乃玉ゝ涼しきゝ為ゝ多 祇貞
夜ゝ子ゝ吟て栄ゝ仕ゝ佛ゝ 小知

きゝ中乃ゝ泡いゝゝの泡と消ゝ
露乃ゝゝ亦電ゝ如し
月ゝ影ゝゝ中ゝ孫ゝ合歓乃ゝ 龜成
いゝゝえゝ人ゝを抜ゝ中ゝ知ゝ
ゝゝみゝしゝゝの
ゝ程ゝ某ゝ玉ゝ
ふゝみゝ多ゝ 田女

追悼

まゝゝゝれてゝゝゝのゝゝゝ

異ふる事侍りぬ

きはふまて世とゝろ弓ゝてゝすゝい　必んき

よゝ記のゝ侍ゝひくちのゝ形ゝ

かゝるゝこゝゝゝの口の侍て　かゝ一ゝ月

ふゝゝい袖て　勝をゝあせゝゝて　お形ゝ

きのふまて門おゝ市をゝもゝゝ

なゝゝ多ゝのゝゝいまゝ出屋ゝ

なゝゝ侍ふゝまゝるゝゝ行事ゝゝ

のゝゝ豊ゝゝゝ

記きむゝ宋侍ゝ尾ゝ侍ゝ　お形ゝ

あゝゝのゝいゝふゝゝ

ゝのゝ無月ゝゝ河ゝ

蒲延ゝゝのゝ敬て机て

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝ行ゝゝゝゝゝ

蒲侍穂の侍ゝゝ　机の那　仝

従来自生尾兼ての御痛

再殺ゝて皐月ゝ姫宮ゝ

なりぬ百年は秋〳〵と思ひ
し元祿の夏のこゝ
枝折きてやのて夏草や夏木立　松瑚

追悼

元祿さし出芽ゆとい夏の初る
くりて張りふきつるれと叫む
極楽去芽ゆ〳〵元行む五月雨　田社

八月二十七日曉　夢想　紀逸

仏を位く葛の裏道　西ふみて
元のふふ神を霊祭ふき　蓼田社
ゆる月ひとり莊子の尼壺千　樓川

百ケ日就泉寺まうす
樫杖木の杖もかふ〳〵墓の露　田社

先府、病中なれども
甘棠公子をいたゝき奉りて

紀逸

二葉の薩摩の御手付葵や牡丹
かきつばたなどの花二わきち　田社
画燭燭燭乃畳まるる
揚下ゝ安き半節をの〳〵
箴策る　鹿もよるなと　月を友
年とふる木の榛乃雨

ちる〳〵牡丹の立赤〳〵と　秋乃風
よるふるおろこの今牡丹岡崎
飲てふふ新と以て　鼻一油
てさむ小判のまとゝ　多像
桑の末ふく村を下のまふら〳〵
幾夜　紫　て　口切　たん什
小風る　時雨る　朝のりさのやき
弦さ　ふ　次男　三男
京造を古風ふ土佐の國ふ也

又のちむ方なのかと夕月
法華経の声満て岳の雪
葉つゝ為仮む竜泉はなを

右追悼一集

摘詞葉 掬水莖

竜生写

世を定ふきよりて限なく老人を
定安るより甚のきりなく有て志ゐ此道ゑ
趣くる支朝夕雲乃ゆくをの形まるや
角空ふ在きさたのれ八自生菴の紀逸ハ
我の門泥乃壱成ふ一言平日八鉄石
の二ゝ又和すれ八妓屋娼家ゑ遊いて
人を肖の次庵中ふ我富貴なきされ
ゝ寒門のるー　みれ志ゝすむそち

八ちきの星霜をへ霜をいかゝ考るまて
も人の差慚の指南むけられす道す
富る福人ホヲ一諾す已に懦弱なる知
らさるすりしてや怙疾す歩んて今と
し皐月八日盡て霊簿ゑつる日乱
惜む涙く悼むへき八我のみゝ母ゝ妻
世ゝ目をしたゝかく基とかなりぬ電
光既みて求れともかゝ為ゝす霜白ゝ氏
消て二ゝかい其姿氏尺き次常ゝぬる

茲ゝとゝ為る以上其厳氏日ゝし忘
里なりゝる龍泉寺ゝかゝて青塚
一堆の主人と次此精舎や妙法蓮華
乃句い当く速成就佛身乃いさ
かしゝ氏ゝかゝゝれゝゝ迚と言そゝ集
怙の趣をゝて句経題とも呼ひゝと
岩代菜園ゝゝ下るし湖十なゝ風窗の
明月を請ゝす是ゝむゝひゝこれを書

昭和十一年五月
松宇文庫本ニヨリ写ス
俊定花